

中世・草戸千軒探検 ⑧

～お堂と墓地～

草戸千軒Ⅰ展示室は、“よみがえる草戸千軒”をキャッチフレーズに、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復元したもので、博物館のメイン展示

となっています。

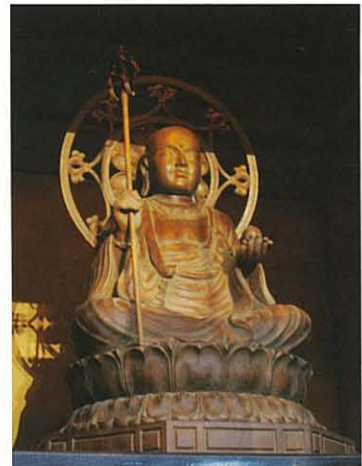
前回までは、職人長屋を一軒ずつ紹介してきましたが、今回は長屋の路地を抜けたところにあるお堂と、その横にある墓地を訪ねてみます。



お堂のたたすまい

このお堂は、町の人々の寄進によって建立されたもので、この町に暮らす多くの人々の精神的な支えとなっています。建てられてから30年ほどが経過して、ところどころに傷みがでてきているため、現在、茅葺屋根・正面の扉・縁側などの修理が行われているところです。職人長屋の隅には現在の大工に当たる番匠ばんしょうと呼ばれる職人によって、仮設の作業小屋（作事場）が組み立てられ、修理のための木材を加工する作業が進められています。草戸千軒の遺跡からは、さまざまな大工道具が出土しており、番匠たちの活動の様子や、当時の建築技術を知ることができます。

職人長屋の間を通る石敷の路地を抜けると、その正面には茅葺きのお堂が建っています。お堂の中には、夕日を浴びて赤く輝く木造の地蔵菩薩坐像じぞうはさつざぞう まつが祀られています。中世は地蔵菩薩の信仰が民衆に広く浸透した時代で、草戸千軒のある備後南部にもそうした波が押し寄せていたことを、現存するいくつかの中世に遡る地蔵菩薩像によって知ることができます。



夕日を浴びて輝く地蔵菩薩坐像

お堂の脇にはいくつかの石塔や板塔婆せきとう いたとうぼが立てられていますが、ここが町の人々の墓地です。中央のひときわ大きい五輪塔が、この町の運営に功績のあった人のお墓で、その周りに、町で

活躍した人々のお墓が並んでいます。

(主任学芸員 鈴木康之)



左) 番匠の作事場

右) お堂の脇の墓地